



TITLE:

社會哲學における主意的二元論的思想(五・完)

AUTHOR(S):

恒藤, 恭

CITATION:

恒藤, 恭. 社會哲學における主意的二元論的思想(五・完). 經濟論叢
1922, 15(5): 688-708

ISSUE DATE:

1922-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127963>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第 卷五十第

行發日一月一十年一十正大

論叢

交通税の長短

法學博士 神戸 正雄

傳統派の社會連帶思想

文學博士 米田 庄太郎

社會哲學に於ける主意的二元論的思想

法學士 恒藤 恭

經濟道と經濟術

法學士 作田 莊一

時論

我國の人口對食糧問題

法學博士 山本美越乃

食料品市場問題

法學博士 河田 嗣郎

資料

金輸出解禁問題

法學博士 戸田 海市

雜錄

戰爭と道德の原則

法學博士 財部 靜治

物價引下策と抽籤景品附賣買

法學博士 小川 郷太郎

排マルクス說の新刊書一二について

法學博士 河上 肇

日銀兌換券發行高の季節的變動

法學士 沙見 三郎

社會哲學における主意的二元論的思想 (五・完)

恒 藤 恭

二十

形制意志としての意志の考察は、實體意志としてのその考察とは全く別の見地から爲される。何となれば形制意志の成立は、人間における有機體意志の形態の完成を俟つて初めて可能であり、各個の記憶の中に未來の活動の表象として存在する無數の素因は、思惟の勞作によつてのみ、多様な構成を受けるからである。思惟された目的、即ち到達さるべき對象又は期望される事象は、着手された活動が方向づけられるための標準をさづける。そして、完全な場合には、目的についての思想が、他のすべての思想及び考察を支配し、従つて任意に選ばえらるる一切の行爲を支配する。かくて多くの目的が一つの目的に仕へるか、又は多くの目的思想が、一つの共同の目的思想に向つて結合し、後者の到達は、前者のすべてに對して手段として役立つこととなる。しかも前者は、更により高き目的との關係において手段の地位に立つ。そこで思惟が十分に意欲を支配する状態は、目的の體統であり、その中で一切の目的は終極において最高の且つ最も普遍的なる一個又は數個の目的にみちびくであらう。但しこの最高の目的は、思惟からその力を由來するの

であつて、思惟はこれに承認と確保とをあたへて、主權的妥當力をさづけるのである。だからかやうな状態にあつては、その上位にたち、その背後に在る思想からして、一切の意欲の現象は抽出され又は説明されねばならぬ。かやうな統制への傾向は、知力の一切の働作において現れる。何となれば、あらゆる現實の知覺は、實體意志から涌起する動能に指導と方向とをあたへることに役立つのであるから。¹⁾

形制意志の全形式は、人が彼の用具として腦中に所持し、以て現實を把握し支配しやうとする所の思想の體系と考へ得られる。かやうな體系は努力(Bestrebung)とよばれるが、努力の巧智を伴ふものは、打算である。打算しつゝ努力する者は、何事をも徒らにはしない、彼の爲す所は何ものかを彼にもたらさねばならぬ。彼のあたへる物は、何等かの形態において彼に返還さるべきであり、彼は常にみづからの利益を顧慮する。彼は表見上多くのことを徒らに爲すやうであるけれど、彼の算勘においては、その價值が見つもられてゐる。そして彼の行爲の終結により、單にすべての損失が回復されるばかりでなく、初めの出費のいかなる部分にも對應しない利得を生じるのであつて、この利得が、行爲の目的たるのである。²⁾ (註)

註 以上に考察したやうな實體意志と形制意志との分類は、テンニースの形而上學的—認識論的思想のうちにその根柢をもつてゐる。彼の見解に従へば、生命としての意志の發展が或る階段に達すると、そのうちに思惟の機能があらはれる。そして

1) G. u. G., SS. 122-124.

2) ibid. SS. 127-128.

思惟の機能を中軸として、根本的に性質を異にする二つの世界が對峙するに至る。思惟その者の歸屬する世界は、無限に連續せる異質多様の内容を包容するところの實在の世界である(Phil. Tenn., SS. 63-65)。之に反して思惟によつて定立される世界は、斷續せる等質齊一の内容を展開するところの觀念の世界である。實在の世界は、その全存在において、唯一の過程を形成し、その中では、完全に相ひこしき事象は何處にも見出されない。そして一切の實在的なものは、相關聯し相連續して有機的全體を構成するのである。しかるに科學的思惟は、作用の主體たるべき全體を區劃しこれらの全體の各個は、相互の關係において、運動の一定方向と一定速度とをもつ所のより小なる全體の多數から合成されるものと考へる。この意味において物體は互ひに牽引する同種の分子にわかれたれ、分子は更に異種類の化學的原子に分たれるが、後者の不同性は同種の原子部分の部位の差異に歸せられる。また理論的純粹力學は、形而上學的原子の概念に酷似せる、無延長の力點の概念をつくり、之を以て實在的な運動及び關係の主體と視る。いづれの場合においても、ある運動の主體として、又はより高き統一體たる或る全體の部分として表象される統一體は、科學的に必要なる擬制である。だから嚴密なる意味においては、終極の統一體、即ち形而上學的原子のみが、その適切な代表者と視られうるわけである(G. u. G., 3. Aufl., SS. 45)。かやうに科學的擬制によつて觀念的統一をあたへられる物體とは異なつて、その全存在において自然的全體としてあらはれ、その部分との關係において、全體としての運動及び作用をもつところの物體がある、有機的物體が即ちそれであり、人間自身もそれに屬する。これらの有機的物體は、部分によつて合成されず、己れ自らに依存し、己れみづからにより制約されるものとして、部分を有つ所の全體を成すのである。人間の技術は、單に無機的物質を分割し結合するにより、無機的なる物を造り出し得るのみである、が同じ仕方て科學的作業により、物は統一をあたへられ、概念の中に在ることとなる。科學は、生けるものゝ關係及び關聯を把握するために、之をして生命を失はしめ、すべての狀態及び力を運動となし、すべての運動をなされたる動作の量として提示し、以て一切の事象を同種類のものとして概念し、且つ相互に變換し得るものとして相互に測定しやうとするのである、けれども有機的生成及び衰滅の現象は、器械的手段によつては理解されえない。この領域に入るときは、科學はその本來の性質を變更し、推論的合理的智識からして、直觀的辯證法的智識に化する、これは哲學

的に思惟するの謂ひである (ind. S. S. の) かやうに、テンニースの觀方からすれば、實在の世界は思惟にあたへられた世界である。科學的擬制の所産たる分子や原子や、普遍的表象としての一切の概念や、人工に係る一切の器具やに於いて見られる統一は、思惟みづからによつて定立された觀念的統一たるに反し、あらゆる有機體において見られる統一は、思惟によつてアブリオリたる實在的統一たるものと考へられるのである。斯かる非合理的自然的統一と、合理的人爲的統一との對立こそは、實體意志と形制意志との對立の基礎を成すものであり、更に後者を通じて社會の兩原形の規定にみちびくものである。

二十一

社會に關する問題を數學的自然科學的方法の應用によつて考察しやうとする傾向と、獨自の歴史的方法によつて考察しやうとする傾向との對立、社會理論の説明原理を個人的なるものゝ裡に見出す傾向と、超個人的なるものに見出す傾向との對立、社會の存立の基礎をその構成員の相互の合意に求める傾向と、社會その者に固有なる意志に求める傾向との對立、社會の構造を機械的に理會しやうとする傾向と、有機的に理會しやうとする傾向との對立、社會の本質の考察において人間の主我的性能に重きを置く傾向と、社會的性能に着眼する傾向との對立——これらの對立における各個の分枝は、必然的に二個の思想方向の中のいずれか一つに歸屬するものではないけれど、大體において、相對峙する二個の根本傾向が、近代の社會哲學の複雑なる思想の關聯のうちに觀取されると言ひ得るであらう。かやうな對立を成す思想傾向のそれそれに伴ふ一面性に陥る

ことを避けつゝ、批判的方法によつて正しい綜合的社會觀に到達しやうとするのが、テンニースの立場である。¹⁾そしてその立場を支へる地盤として、以上に概観したやうな意志の理論は構成されたものといふべく、更にこの意志の理論によつて導かれつゝ、それとの並行において彼の社會の理論は展開されるのである。

テンニースの考へによれば、人間の共同生活の事實は三様の科學的考察方法、即ち生物學的、心理學的及び社會學的考察方法によつて認識される。人間の共同生活の事實の十分なる洞察は、最後の方法によつてのみ可能であるが、社會學的認識の主要なる對象は、社會關係 (Soziale Verhältnisse)、社會意志 (Soziale Willen) 又は社會價值 (Soziale Werte) 及び社會結合 (Soziale Verbindungen) の三種にわかれる。²⁾社會關係の認識については、社會學的考察方法は、生物學的及び心理學的考察方法殊に前者と連關する所が大である、社會意志の認識については、心理學的考察方法に俟つ所が多い、社會結合の認識においても、そうした連關は缺き得ないけれど、茲に至つて初めて社會學的認識は獨自の對象をあたへられ、自己の特色を發揮するのである。³⁾

人間の生活、從つてまたその共同生活は、外面からも考察し得られるけれど、内面からしてのみ、即ち吾々の自己認識によつてのみ十分に理解し得られる、これによれば、人間は一定の衝動と、及びその促進又は抑壓に伴ふ感情とによつて規定されるといふこと、且つ人間は官能的感觉

1) Zur Einl. in d. Soz., S. 247; D. W. d. Soz., S. 7; Entwicklung der Soziologie in Deutschland im 19. Jahrhundert, SS. 36-37 (Festschr. zu Schmollers 70. Geburtstag)
2) D. W. d. Soz., SS. 3, 8, 11, 17; Soziologie und Geschichte (Die Geisteswissenschaften, 1913, Heft 3) S. 57.
3) Soz., SS. 26-27.

及び前者を集括する悟性の力によつて、利害及び得失をあらかじめ識別するといふことが知られる。人間を相互に結合するものも、この感情及び感覺に他ならぬ。而して社會的又は親和的な性能なり思想なりは、不斷の矛盾と衝突との中に立つものであつて、愛と憎しみと、信頼と猜疑と、感恩性と復讐心とが互ひに錯綜するために、人間の利益と計畫とは或は調和的に或は非調和的に相交渉し、人間の感情と思慮とは或は結合し或は離反する。人間の共同生活の心理學的考察にとつては、親和と反目と、扶助と鬭争と、平和的團結と敵對的軋轢とは、それ自身には同等の重要さをもち、同等の興味をひくにすぎないし、また生物學的考察は此これらの現象が生活を増進するか又は抑壓するかといふ結果の上からのみ、これらの差別を考慮する。反之、社會學的考察は、主として且つ第一次に、相互肯定の事實ともいふべき事實に、即ち固有の意義における社會的事實に着眼する。もとよりそれは、相互的否定の事實にも興味をもつけれど、其意味は、生物學的考察が非有機的物質に、化學的考察が物理的集積狀態に興味をもつのと異ならぬのである。⁴⁾

二十二

かやうに、テンニースの意見に従へば、人間の共同生活の事實の認識は、人間の相互的肯定としての社會的結合に、その興味の中心點を有するものであるが、社會的結合に關する一切の考察

は、社會的結合の二原型即ち協同體と社會體との分類の定立から出發しなければならぬ。

人間の意志は相互に種々の關係に立つ、これらの關係の各個は、一方の側において爲され又は與へられ、他方の側によつて負擔され又は受領される所の交互的作用である。しかるにこれらの作用は、或は他人の意志及び身體の維持に役立つやうな性質を有し、或はその破壊にみちびくやうな性質を有する。相互的肯定の關係の各個は、多における一、又は一における多を提示する。それは、一方より他方へと向つて行き、意志とその力の表白と視られる所の要求や、緩和や、所業やから成立する。この積極的關係によつて構成される群は、内部及び外部に向つてはたらく者又は物として統一的に把想される場合に、結合とよばれる。人間は、人間の肯定への傾向、即ち人間との結合への傾向を性來もつてゐる、但しそれは、單に本能にのみよるのではなく、より高尚なる感情及び合理的なる意識にもよるのである。そして傾向からして意欲が生まれ、肯定される對象の價值を知つてゐる明白なる肯定が生まれるのである。¹⁾

あらゆる統一 (Einheit) は二様に概念しえられる、即ち一方には、統一が數多 (Vielheit) の前に存し、後者は前者から發生すると考へ得られ、他方には數多が先づ存し、統一はその構成物であると考へ得られる。知覺しうべき自然の世界についていへば、前の種類の統一は、有機體の本質であり、後の種類の統一は、無機集積體の本質である。前の場合には、統一は實在的であり、

1) G. u. G., S. 3; D. W. d. Soz., S. 5.

物自體であるし、後の場合には、統一は觀念的であり、かゝる全體の表象及び概念をつくり出す人間の思惟によつて制約される。²⁾

かやうな統一の根本的種別は、各種の對象の世界を通じて觀取される。テンニースは、心的なるものと物的なるものとを自同的なるもの、二つの側面と認めるものであるが、心的なるもの、世界においては、右の種別は、實體意志と形制意志との對立となつてあらはれ、物的なるもの、世界においては、有機體の機關と人工の機械との對立において、その著しい表現に會する。³⁾更にテンニースのいはゆる社會的實在の世界においては、同様な對立が人間の社會的結合の二種別を生ぜしめる。即ち社會的結合は、理性者としての個々の人間から構成される一の全體であるが、この全體もまた部分に先立つて存立するか、又は部分によつて初めて合成される、前の種類の構成物は協同體とよばれ、後の種類のそれは社會體とよばれる。

人間の結合は、それに屬する個々の人間の意志を通じてのみ、その存立を有する。この點からみて一切の社會的形象は、精神的、觀念的なるものであるが、それを成立せしめる所の統一が、實在的であるか否かに従つて、社會的形象は、實在的なるもの即ち精神的、有機的なるものと、純觀念的なるもの即ち一切の實在根據から分離して存立するものとの二種類に區別される。そして社會的結合において、かやうな二種類の統一が成立する所以は、結合の原理を成すところの相

2) Z. Einl. in d. Soz., SS. 240-242.
3) cf. G. u. G. SS. 143-144.
4) cf. D. W. d. Soz., SS. 22-23.
5) Z. Einl. in d. Soz., S. 242.

互的肯定が、實體意志によつてあたへられる場合と形制意志によつてあたへられる場合とがあるからである。⁴⁾ 人間の意志の本質であり、従つて實體意志並びに形制意志に共通なる點は、對象の思维的(意識的)肯定又は否定たることに存する。そして對象の肯定又は否定は、いつも活動の肯定又は否定に歸しえられる。思维その者もまた肯定的又は否定的活動であり、綜合又は分解のはたらきをいとなむ。或る對象の思维的肯定又は否定は、他の對象との關係における肯定又は否定であつて、それらの對象は相互の關係において定立されるのである。この觀念の連結の最も重要なのは、手段と目的との連結であるが、目的と手段とは、互ひに他を包容する場合と排斥する場合とがある。前の場合には、目的と手段とは、一の實體的統一に共屬する、そして後者は、その部分たる目的及び手段に先立つて存在し、自生的分化の過程により前者のうちに没入する。その際爲される仕事が肯定される故に、活動が肯定されると共に、活動が肯定される故に、仕事が肯定されるのである。之に反して、目的と手段とが相排斥する場合には、両者からして初めて統一が構成されなければならぬ。この事は目的が自己の力の外にある事象であり、手段が自己の力の内に在る事象である場合に、最も分明にあらはれる。両者は機械的強制を以て作用し合ふのであつて、目的の追求は、手段として意欲される所のもの、原因となり、手段の意欲は、目的が到達されることの原因となるのである。⁵⁾

4) Entwickl. d. Soz., S. 37; W. d. Soz., S. 19 ff.

5) Z. Einl. in d. Soz., SS, 249-250.

實在的有機的存在物として概念された人間の結合を協同體といひ、觀念的機械的に概念された人間の結合を社會體といふ。⁶⁾ 前者においては、全體としての結合が先づあたへられ、個人は全體の部分として初めてその存在を有するに反し、後者においては、個人が先づ存在し、個人の作爲を俟つて初めて全體は形成される。⁷⁾ 協同體にあつては、部分たる個人は自己みづからを實在的全體の成果として思惟するに反し、個人が一定の力と權利とを具備しつゝ、自己と並存する他の者に作用し得るやうな組織においてのみ、社會體は思惟され得る。⁸⁾ 協同體は結合された實體意志の主體であり、實體意志が人間の身體の心理的對當者たるかぎりにおいて、その存立の根柢を深く有機的自然の世界のうちに有する。之に反して社會體は結合された形制意志の主體であり、單に人間の生活の必要と便宜に基いて構成され、純然たる觀念的存在を有するにすぎない。⁹⁾ 前者においては、結合その者が肯定され、結合そのものが目的として是認されるが、後者においては、本來單に個人的なる目的が相並立し、それらに役立つところの單なる手段として、結合は肯定され價值ありとされるのである。¹⁰⁾ だから協同體を構成する個人は、種々の點において互ひに分離してゐるやうに見えても、本質的には結合されて居り社會體における個人は、種々の點において結合されてゐながら、本質的には分離してゐるのである。¹¹⁾

6) G. u. G. S. 3.
 7) Z. Einl. in d. Soz., S. 242.
 8) Entwickl. d. Soz., S. 37.
 9) G. u. G., S. 206.
 10) G. u. G., S. 198; Entwickl. d. Soz, S. 37; Z. Einl. ind. Soz, SS. 249-250.
 11) G. u. G., S. 46.

二十三

協同體の基本的形態を成すところの人間意志の完全なる統一は、さまざまに條件づけられた個人相互の間における關係の性質にしたがつて、種々の形態において成立するのであるが、これらの關係の最も普遍的なる根基を成すものは、出生による植物的生活の關聯である、換言すれば、身體の心理的對當者たる人間の意志が、血縁及び性によつて相互に結合されるといふ事實である。直接なる相互的肯定を意味するところの斯様な人間の結合は、三様の關係において最も顯著に表現される、その一は母と子との關係であり、その二は配偶者としての男と女との關係であり、その三は兄弟姉妹の關係である。¹⁾これらの實體的統一としての血縁的協同體が發展し分化するとき、同一地域における居住において現れる地域的協同體が成立し、後者は更に、同一方向、同一意義における協力としての精神的協同體を發生せしめる。人間がかれらの意志によつて有機的に相結合し、相肯定する處では、以上の如き血縁關係、隣人關係及び交友關係のいづれかが成立する。血縁關係は家を中心として存立し、共同の居住、種々の財殊に食物の共同の所有及び享樂、祖先の祭祀などにおいて顯著に發現する。隣人關係は、村落の共同生活の一般的特徴を成すものであるが、茲では、住宅の接近、耕地の共同が、人間の接觸を密接にし、相互の信頼を生ぜしめ

1) G. u. G., SS. 9-10.

る、そして共同の労働、秩序、管理が行はれ、土地や水の神たちが共同に祭られる。友交關係は血縁關係並びに隣人關係から獨立に、労働や思想の一致の條件及び結果として成立する、從つて職業又は技術の同一によつて生ずる場合が多く、都市において最も發達し易い。そこでは、職業、階級、信仰を同じくする人々が、精神的紐帶によつてつながれ、共同の事業に向つて労働することを感じる。そして共同の精神によつて祀られる神が、少からずこの關係の維持發達をたすけるのである。²⁾

協同體において結合せる共同的意志を諒解 (Verständnis) といふ。それは、他人の生活に對する直接の關心、即ち悦び及び悲しみに對する同情によつて條件づけられ、且つそれらを要求するものであつて、各人の性格、思想、經驗が類同してゐるほど成立し易い。諒解の最も重要な機關は言語であるが、言語は諒解の手段たるに留らず、諒解その者であり、諒解の形式たると共に、その内容たるのである。義務及び權利、善及び惡についての諒解は、契約に比較しえられるが、後者は作爲され決定されるところの合意であり、交換される約言であつて、言語を前提し、明瞭なる概念によつて表白されなければならぬ、もとより默示によつて爲されることもあるけれども、それは例外に屬する。しかるに諒解の内容は、言ひ盡し難く、無限的であつて、概念的ではない。そして作爲されるものではなくて、適當な條件が存するときは、あたへられた胚芽からおのずと

2) ibid., SS. 16-18.

展開するものである。³⁾

二十四

社會體の理論は、互ひに平和的に並び生存してゐながら、實體的に結合されず、分離してゐるところの人間の集團を構想する。だから社會體においては、先天的に必然的に存在する統一からみちびき出され、従つてこの統一の意志と精神とを個人において表現するやうな活動は行はれない。茲では、各人は孤立し、一切の他の人から分離せる状態に在る。かれらの活動と力との領域は、相互に嚴重に區劃され、各人の接觸と侵入とを防止しやうとする。かやうな消極的態度がこれらの力の主體相互の間の正常的且つ基本的なる關係であつて、静止状態における社會體を特徴づけるものである。何人も、彼が與へる所と同等なりとみとめる反對給付又は對價を受けるのである。他人に或る物を與へやうとしない。實にその對價が彼にとつてより望ましいものであることが必要であり、より長く見える所のものゝ欲求によつてのみ、彼は自己の財を手放すことを肯んずるのである。¹⁾

社會體を成立せしめる所の最も根源的な事實は、交換行爲である。交換における物の讓與と受領との行爲によつて、雙方の主體が意欲する所の共同の領域が成立し、その行爲の時間だけ存

3) *ibid.*, SS, 22-24.

1) G. u. G., SS, 46-47.

續する。この時間においては——それは殆んど零に近くまでも想定しえられる——一方の主體の領域を離れやうとする財は、該主體の意志又は支配に全然服するといふのでなくなると共に、他方の主體の意志又は支配に全然服することにもなつてゐない。それは甲の部分的支配に服すると共に、乙の部分的支配にも服するのである。即ちそれは共同の財であり、社會的價值である。この場合に、交換される財に關係せしめられる、結合された、共同の意志は、雙方の行爲が完了するまでは、その實行を要求するところの統一的意志として思惟しえられる。それは主體として思惟される限りにおいては、統一體として思惟されなければならぬ、何となれば、或るものを存在者として又は主體として思惟することは、それを統一體として思惟することゝ同一だからである。かやうに雙方の動作は、相互に條件づけられ、従つて同時に行はれるのであるから、交換その者は、合せる一個の行爲として、擬制された社會意志の内容たるのである。²⁾

社會體は、その意志及び領域が相互に多様の關係と結合とをもちながら、しかも相互に獨立であり、内面的交渉をもたないところの自然的及び人爲的個人の多數から成立する。この概念においては、人間の原始的又は自然的關係は悉く抽象されるのであつて、社會體の可能性はある事を作爲し、従つて或る事を約束する能力をもつところの人格の多數を前提するにすぎない。社會體においては、各人は自己の利益を追求し、自己の利益に役立つ限りにおいてのみ他人を肯定する

2) *ibid.*, SS. 47-48.

のであるから、協定以前及び以外における且つ各個の契約以前及び以外における各人對各人の關係は、潜在的反目又は鬭爭として概念さるべきであり、これに對する調停及び和睦として、意志の結合は行はれるわけである。そしてかくの如きは、純粹なる財産及び價值の上にあらゆる權利義務が歸せしめられる所の一切の交易及び商業の事實を表白する考へ方である。而して一般に一切の社會體的關係は、提供された可能的給付の比較に基くものであるから、人間と人間との交渉は、先づ物質的可見的對象の上に向けられ、單なる活動や言語やはその十分なる根柢となり難い、之に反して協同體は、第一次に身體の關係であり、行動及び言語によつて表現される、從つて物に對する共同の關係は第二次的であり、物は交換されるよりは、むしろ共同に所有され享有されるのである。³⁾

主としてその經濟的領域において考察するときは、社會體の發達は、家族經濟から商業經濟への推移として、且つそれと關聯して、農業から工業への推移として現れる。この推移は恰も計畫的に行はれるやうな觀を呈し、各國民の間において商人としての資本家が先頭に立ち、且つ共同の目的のために團結するかのやうに見える。そしてあらゆる地域は商業の舞臺となりうるが、それが擴大するに伴うて、社會體は愈々完全に發展する。けだしその範圍が廣ければ廣いほど、人間及び財が相互の關係において有つところの種々の性質は除却されて、純粹なる交易の法則の支

3) ibid., SS. 60-63.

配が増大するからである。そして商業の領域の擴大と共に、その指導者たちが爲す所の一切はこれらの利潤のために爲されるといふ事實が、明瞭に純粹に眼に映じるやうになる。⁴⁾人間のあらゆる創造、構成、制作は、人間の意志が、形式をあたへつゝ外界の物質の中に流れ入る藝術的、有機的活動であり、それが協同體の維持、發展又は愉樂のためになされる場合には、協同體自身の機能として考へえられ、恰も協同體が個人をとほして自己を表現するかのやうに見えられる。之に反して利潤を収める才能としての商業は、かゝる技術の正反對である。利潤は何らの價值でもなく、財産關係の單なる變更にすぎない。そして商人は協同體の生活の一切の拘束から自由であり、それを無視すればするほど、彼は商業に適應する。二重の交換によつて増加し得られる所の貨幣の所有者たる資本家は、社會體の自然的支配者であり、命令者である。社會體はこれらのために存在し、これらの道具に他ならぬ。そして勞働者が、勞働手段及び享樂手段としての財産を失ひ、單なる勞働力の所有者となり、之を貨幣と交換することによつてのみ生活し得るに至つて、社會體における商人又は資本家が勞働者に對して行ふ支配は實現されるのである。⁵⁾

二十五

個人の精神生活において、實體意志が原本的なのであり、それから思惟並びに形制意志が發

4) *ibid.* S. 63 ff.

5) *ibid.* SS. 66-67.

展するやうに、種々の國民の歴史においても、協同體的生活形式から社會體的生活形式が發展し民族的文化から國家的文明が發展するのを見る。原本的な力として民族の實體を成すものは、家、村落、地方的都市である。其處では優越せる個人が、君主、諸侯、武士、僧侶、藝術家、學者などの形態において現れる。彼等は民族の全體により、民族の意志と力とにより制約され、規定される。彼等の優越を支持する所の民族的意志は、經濟的條件と關聯せるものであり、彼等の支配は經濟的支配であつた。然るに商人たちが種々の形式において、殊に資本主義的生産又は大工業により國民の勞働力を自己に服せしめるに至つて、經濟的支配は彼等の手に移つた。そして自由なる個人の交易の條件の設定、資本主義的生産の條件及び形式の設定は、商人階級の使命とされた。この社會秩序の變革と平行して法の内容及び形式にも變動を來し、純粹なる契約が全組織の根柢となり、次第に社會體の形制意志が、法律秩序の設定者、維持者、運用者となるに至る。かくして法律は風習の作品又は慣習法からして政治の產物たる制定法に變化した。これらの變遷の結果として、精神生活も全然面目を異にするに至つた。全く想像に根ざしてゐた精神生活が、今や思惟に倚存するやうになり、嘗つては超感覺的なものに對する信仰が中心を成してゐたのが、感覺的自然の認識がその地位を奪つてしまひ、國民生活から生まれ又はそれと共に生長せる宗教は、國民に優越せる精神によつて養はれる科學にその支配をゆづつた¹⁾。

1) G. u. G., SS. 280-282.

實體意志及び協同體によつてあたへられる共同生活の外面的形態は、家村落及び都市である、これらの三者は歴史的生活一般の永續的類型であり、發達せる社會體の時代においても、これらの協同體の力は、減退しながらも、存續し、社會生活の實在性を構成するのである。國民生活の發展は、家族生活及び家族經濟が基調を成す時代から、商業及び大都市生活が基調を成す時代に向ふのであるが、協同體の時代だけについて見ると、更にその中に時期を劃することが能きる。第一期は、土地の耕作によつて與へられる新基礎の作用によつて始まり、血縁關係を基礎とする氏族と並んで、隣人關係を基礎とする村落が生長する。第二期においては、村落から都市が發達する。家族生活の中心は祖先の共同の信仰にあつて、その原理は時間的であるが、村落並びに都市における共同生活の原理は空間的である。しかも協同體の時代を通じて、空間的原理は時間的原理によつて制限されるが、その制限は都市において次第に力を失ひ、大都市において全く除却される。茲では人間の共同生活はその協同體的特徴を失ひ、孤立的人格として並存する市民が、偶然的住所として共同の地域に存在するにすぎないこととなる。かやうな社會體の發達が國民の間にひろがつて行くと、全地方が一個の大都市に類同するに至り大都市も地方も全く相互に自由なる人々から成立する状態を呈する。彼等は絶えず交易において接觸するけれど、その間に新たな協同體を繼續的に發生せしめることなく、むしろ無數の外部的關係即ち契約關係を通じて、

互ひに敵視し、抗争する。殊に有産階級又は支配階級と、無産階級又は被支配階級との間に於いて激烈なる闘争が行はれるのである。(註)

註 テンニースは、古き時代に榮え、現に衰滅しつつある自然的文化形式は communistic であり、現在せる生成しつつある文化形式は socialistic であるを視て居り、従つて社會生活の全發展は、(單純なる、家族的なる) 共產主義及びそれな基礎とする(村落的、都市的) 個人主義から、獨立なる(大都市的、世界的) 個人主義及びそれによつて定立される(國家的、國際的) 社會主義へ向ふものと考へてゐる。そして、歴史及び文化の中に發見される個人主義は、協同體から發生し、それによつて制約されるもの、又は社會體をつくり出し、それを支持するもの、外には、存在しないものすべてである。(G. F. G. SS. XXVIII-XXIX, 293 cf. Die Neue Zeit, 37. Jahrgang 2. B. S. 253)

二十六

テンニースが、如何なる仕方で、その主意主義的見地から、個人主義的及び超個人主義的社會觀の二者を綜合してゐるかといふことは、以上の考察によつて略明かにし得たと思ふ。

彼の社會體の理論は、個人主義的社會觀の繼續であり、社會契約説の新しき展開であるとも言ひ得られるであらう。形制意志の結合としての社會意志は、法理的意義を脱却せしめられた社會契約的合意の別名であり、社會體其者の本質は、個人主義的國家のそれと相照應する所がある。

また彼の協同體の理論は、ヘーゲルや歴史法學派や社會有機體論者やにおいて見られる超個人主

2) ibi d., SS. 282-288.

義的社會觀の修正たる意義をもつてゐる。實體意志の結合としての社會意志は、ヘーゲルにおける客觀的意志を想はせるものであるが、後者が合理的理智的たるとは違つて、前者は不合理的本能的たる點において、むしろシヨペンハウエルの生命への意志に類するものである。しかも生命への意志の上に打ち建てられる社會生活は、主我的個人の不斷の闘争狀態たるに反して、實體意志を基礎とする協同體においては、個人と個人とが直接に相肯定し相協力し又は共有の財を共同に享有するのである。歴史法學派の基本概念たる國民確信は、テンニースの實體的社會意志と著しく類似してゐる點があるけれど、後者は前者のやうに形而上學的實在性をあたへられてゐるものではなくて、個人の意識のうちに確實なる存立の根柢を有するものである。

實體意志及び協同體の理論と、形制意志及び社會體の理論とは、上に見たやうな鮮明な對照において展開されてゐるけれど、両者は果して統一的見地から十分なる綜合を施されてゐるのであらうか？意志はそれ自身のうちから思惟を發展せしめ、實體意志を地盤として形制意志は生長すると、テンニースは説いてゐるが、何故に前者から、それと相容れない後者が發生して前者と峻しい對立を成しつゝ獨自のはたらきを營むのであるかは、分明でないし、両者の關係がかやうに思惟されなければならぬ理由も確實にあたへられてゐない。そして意志その者の發展に伴うて、協同體から社會體が生まれるのであり、協同體の形式が人間の共同生活を支配する時代に次いで

社會體の形式がこれに代る時代が到來するとされてあるが、歴史の經過は更にいかなる時代を齎すものと豫想されるであらうか？テンニースは彼の、いはゆる共產主義的文化の時代の後を受けて現に榮えつゝあるところの、彼のいはゆる社會主義的文化の時代に次いで來るべきは、新しき共產主義的文化の時代、より高き協同體の時代であらねばならぬと述べてゐるが、それは根本において、ヘーゲルの社會哲學の辨證法的構成に倣ふものであると考へられる。しかもヘーゲルにおいては、社會生活の辨證法的發展は、之を支持し促進する客觀的精神によつて論理的に可能とされるのであり、家族から公民的社會へ、公民的社會から國家へと、客觀的精神の實現の階段が確立されてゐるが、テンニースにはかやうな深い基礎づけは缺けてゐる。なほ考察から省いたけれど、協同體及び社會體に對する國家の關係についてのテンニースの見解は、ホッブスなどの個人主義的思想の影響を著しく被ると共に、ヘーゲルの影響をも示してゐる。

私はかやうに考へて來て、テンニースの社會理論は前に擧げた綜合の任務を完全に成就してゐるものではないと判斷するが、しかし彼のすでに爲しとげた所が、多くの眞理と暗示とを含むものであることを疑はないものである。

— 完 —

1) *Gemeinschaft und Gesellschaft* (Die Neue Zeit 37, 2. B. SS. 253, 256.)